

お住の霊

岡本綺堂

青空文庫

これは小生わたくしの父が、眼前まのあたりに見届けたとは申し兼ねかねるが、直接にその本人から聞取つた一種の怪談で今はむかし文久の頃の事。その思召おぼしめしで御覽を願う。その頃、麴町霞ヶ関に江原桂助という旗下（これは漢学に達して、後には御目附に出身した人）が住んでいた。その妹いもこは五年以前、飯田町に邸やしきを構えている同じ旗下で何某隼人（この家は今も残っているから、姓だけは憚る）という人の許もとへ縁付き、兎まで儲けて睦しく暮らしていたが、ある日だしぬけに実家さとへ尋ねて来て、どうか離縁を申し込んでくれと云う。兄も驚いて、これが昨日今日の仲でも無し、縁でこそあれ五年越しも睦しく連添つていたものを、今更突然に出るの去るのと云うは一向その意を得ぬ事、一体どうした情由わけだと、最初はじめは物柔かに尋ねたが、妹は容易にその仔細を明かさずただ一刻も彼の邸あには居られませぬと云う。けれども小児こどもでは無し、ただ嫌だ、一刻も居られぬとばかりでは事が済まぬ、その仔細を云え、情由を話せと厳しく詰問すると、妹は今は據よんどころなく、顔色変えて語り出したのが、即ち次の怪談で――。

妻わたくしが彼の邸あへ縁付きましてから、今年で丁度満五年まるその間別になつた事もございませんでしたが、今から十日ほど以前の晩まえ、時刻は子の刻過ねでもありましようか、薄暗い行あんど

燈^うのかげに何物^{なに}か居て、もしもしと細い声^{こゝろ}で妾^{わたくし}を呼起しますから、何心なく枕^{まくら}をあけて
視^みると、年^{とし}齡^{れい}は十八九頭は散し髪^{かみ}で顔^{いろ}色の蒼^{あざ}ざめた女、不思議な事には頭^{かぶ}から着物^{もの}までビ
シヨ湿^ぬれに湿^ぬれおれた女が、悲しそうに悄^{しやんぼり}然座^ざつて居りました。おヤツと思う中に、
その女はスルスルと枕^{まくら}辺^{もと}へ這^はつて来て、どうぞお助け下さい、ご免なすつて下さいと、
乱れ髪^{かみ}を畳^{たた}に摺^す付けて潜^{かづめ}然と泣く。その姿の悲^い惨^{じら}しいような、怖^こしいような、何とも云
えない心持^{こころもち}がして、思わずハツと眼^めを閉^ふじると、燈^{あかり}火^ひは消える、女の姿も消える。この途
端^{はし}に抱^{かか}寝^ねしていた小兒^{こども}が俄^{おび}に覺^おえて、アレ住^{すみ}が来た、怖^こいよと火^かの付くように泣^な立てる。
ようよう欺^{うか}し賺^{すか}してその晩^{ばん}は兎^ともかく寝^ね付きましたが、その翌^ある晩^{ばん}も右^{みぎ}の散^ちし髪^{かみ}の湿^ぬしお
れた女が枕^{まくら}辺^{もと}に這^はい寄^よつて、御免^{ごめん}下さいと悲^{かな}しそうに訴^うえる、その都度^{たび}に小兒^{こども}
までが夢^{ゆめ}に覺^おわれて、アレ住^{すみ}が来た、ソレ住^{すみ}が来た、怖^こい怖^こいと泣^ないて騒^{さわ}ぐ、妾^{わたくし}は心の迷^{まよ}
いという事もありましようが、何にも知らぬ三^み歳^{さい}や四^よ歳^{さい}の小兒^{こども}が、何を怖^こがつて何を泣^なく
か一向^{いこう}解^とりませぬ、その上^う何^{なん}うして住^すという名^なを識^しつて居りますか、それも解^とりませぬ。
それが一晚^{いっばん}や二^に晩^{ばん}でなく三^{さん}晩^{ばん}も四^し晩^{ばん}も、昨^け夜^やでモウ十日^{じゅうにち}も続^{つづ}くのでございますから、とて
も我慢^{まんまん}も辛^{から}抱^{かか}もできません。その蒼^{あざ}ざめた顔^{かほ}その悲^{かな}しそうな声^{こゝろ}、今も眼^めに着^きいて耳^{みみ}につい
て、思^{おも}い出^でしても悚^{ぞつ}然^{ぜん}とします——と声^{こゝろ}顫^{ふる}わせて物^{もの}語^ごる。

兄は武士、斯くと聞くより冷笑あざわらつて、お前も武士の女房でないか、幽霊の變化のと云う物が斯世このよにあると思うか、馬鹿も好加減いにしろと頭ごなしに叱り付けたが妹は中々承知せず、何うあつても彼の邸あには居られませぬと思い入つたる氣色けしきに、兄も殆ど持余もてあまして、これには何か仔細があらう、妹の片言ばかりでは証にならぬから、兎もかくも一応先方へ問合せた上、また分別もあらうと思案して、取あえず飯田町の邸へ出向いて主人あるじの隼人に面会し、さて甚だ馬鹿馬鹿しい事で、実にお嘸にもならぬ次第ではあるが、妹が斯く斯く申して是非とも離縁を申し込んで呉れと云う、ついては右に付き、何か御心当りの事でもござらうかと尋ねると、隼人も最初はじめは笑い、後には眉を顰めて、それは近ごろ不思議な事を承わる、御存知の通り、拙者は当邸やしきに生れて已に二十余年に相成るが、左様な事は見もせず聞も及ばぬ、しかし拙者の妻に限って毎夜左様な不思議を見るというも何分解げし難き次第、兎も角も念の為に一応詮議致して見ましよう云うので、年古く召仕つている下女下男などを呼出して、何か心当りの事でもないか、その以前に邸内で変死した者でもあるかと吟味したが、何れも顔を見合せるばかりで返答こたえがない。しかしその女が湿ぬれしおたれて居ると云うのを見れば、或は水死した者ではあるまいか、とてもものに池を探して見ると隼人が云う。

何さま斯の邸には大きな池があつて、水の淀んで碧黒い処には水草が一面に漂つていて、夏になれば蛇や蛙宮守の棲家となる、殊にこの池は中々底深いと聞くから、或はこの水中に何物か沈んでいるのではあるまいか、物は試して一応その搔堀をして見ろと云うことになつて、下男や家来共はその用意に取かかる処へ、この噂を聞いて奥から怖々出て来たのは、当年八十歳の女隠居で、当主隼人の祖母に当る人だ。見ると、手には珠数を爪繰つて、口には何か念仏を唱えている。

この隠居が椽端近く歩み出て、今や搔堀を面白半分に騒ぎ立つ家来共を制して、もうそれには及びませぬ、緯の仔細は妾が能う知っていますと云うから、一同も不思議に思つてその顔を見つめてみると、隠居は思わず大息ついて、アア悪い事は出来ぬもの、成ほど住も迷つて来ましようと思えば怖い事、南無阿弥陀仏と念じながら、ここに語り出す懺悔を聴くと、当主の祖父が未だ在世の頃、手廻りの侍女にお住と云う眉目妍い女があつて、是に主人が手をつけて何日かお住は懷妊の様子、これをその奥様即ちこの隠居が悟つて、お定まりの嫉妬から或日の事、主人の殿が不在を幸いに、右のお住を庭前へ引据えて散々に折檻し、その半死半生になつたのをそのままに捨て置いた。で、お住は苦しいと口惜いに心も乱れたと見えて、いつかその池の畔へ這寄つて、水底深く沈んで了つたと

は、如何にも無惨極まる次第で、その時代の事であるから何事も内分に済せて、死骸は親許^{もと}へ引渡し、それで無難作に埒が明いた、しかしその後^{もと}に別に怪しい事もなく、その主人は已に世を去り、その息子も世を去つて、当主隼人の代になつた、その間^{あたか}恰も五十年を経過しているから、その頃の奉公人なども或は死し、或は暇を取つて、当時は誰もこれを知る者もなく、現に当主の隼人すらも一向に知らぬ位^{したが}、随つて他から縁付いた江原の妹やましてその小児などが夢にも知ろう筈はなく、又曾てそんな事があつたろうと偶然に思い付く道理もない。知つていればこそ心の迷いも起れ、知らぬ者の眼に怪しい影の映ろう筈がなく、ましてその小児がお住の名を知つて居ろう筈がない、シテ見れば正しくお住その者の幽魂が迷つて出たに相違ない。数うれば当年^{ことし}は恰もその五十回忌に相当すると、隠居は懺愧と恐怖に顔色を変えて了つた。

隠居一人が胸に秘めて、五十年来誰にも洩さなかつた秘密が、ここに初めて露見したので、孫の隼人を初め江原も緯^{こと}の不思議に驚いて、この上は唯一^{いちず}図に嘘だとか馬鹿馬鹿しいとか云消^いして了う訳には往かぬ。殊に当年が五十回忌に相当するといふもいよいよ不思議と、何れも奇異の感に打れて、兎も角もそのお住の得脱^{とくだつ}成^{しょうぶつ}仏^{ぶつ}するやうに、仏事供養を営むが可からうという事に一決して、一同その墓所へ参詣し、懇^{ねん}切^{ごう}に回向した。で、

その幽魂が果して成仏したかどうか知らぬが、その後は何の不思議もなく、妹も旧の如くその邸へ戻って夫婦睦じく暮したという。

私も武士、且は青表紙の一冊も読んだ者、世に幽霊や妖怪変化があらうとは、どうしても信じられぬが、この一条ばかりは何分にも合点が往かぬ。その亭主も知らず、まして当人は夢にも知らぬ女の姿がありありと眼に映り、しかも小児までがその名を知っていると云うのは、どういう情由であろう。実に世には理外の理というものが有るものだ、右の江原が折々に人に語って生涯その疑惑が解なかつたとの事。

（『文藝倶楽部』20年4月号）

* 不通庵〈妖怪談〉より。筆名は「狂生」使用。

青空文庫情報

底本：「文藝別冊「総特集」岡本綺堂」河出書房新社

2004（平成16）年1月30日発行

初出：「文藝倶楽部」

1902（明治35）年4月号

※初出時の署名は「狂生」です。

入力：hongning

校正：noriko saito

2004年8月10日作成

2013年8月11日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

お住の霊

岡本綺堂

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>